京都大学新聞

京都大学新聞社
京都市左京区吉田
京都大学構内
京都郵便局 8111 内 2441
通 2054 直通
振替・京都3909
（1部20円）

東大への精鋭★国立文理の権威
東大国立ゼミ
京都市山科区四ノ宮駅徒歩中央

昨秋の日米共同声明をもって七十年代戦略を確立した日本帝国主義ブルジョアジーは国内あらゆる領域における帝国主義的再編を、自らの命運をかけて推し進めようとしている。このブルジョアジーの動向に呼応するように、労働戦線内部では、同盟、民労協、IMF・JCなどを中心とした、帝国主義労働運動の胎動が進みつつある。この様な動きに抗して、生産点において、より一層の資本への隷属を断ち切るべく、反戦派労働者の闘いがくりひろげられている。

本紙編集部は、昨秋の安保決戦以降、「生きたカリキュラムとしての学生運動」「労働者闘争との結合」を追求してきたが、ここにその一環として開いた労働運動シンポジウムの第二回を掲載する。

今回は、六月の北病移転阻止闘争を実力闘争として闘いぬいた東大病院反戦および東大技師共闘、昨秋十・二一闘争をマッセンスとして闘った反戦中電ストの報告を掲載する。

（編集部）

第二回

◇出席◇
大阪中電ストを実
京大病院労研
東大技師共闘
東大病院反戦
畑鉄工反戦反合行動委
マスコミ反戦
（NET全労闘
NTV全労闘）

◇司会◇
有田越郎氏
（社会党東京都本部
解雇撤回闘争委）

全国医療戦線の構築へ

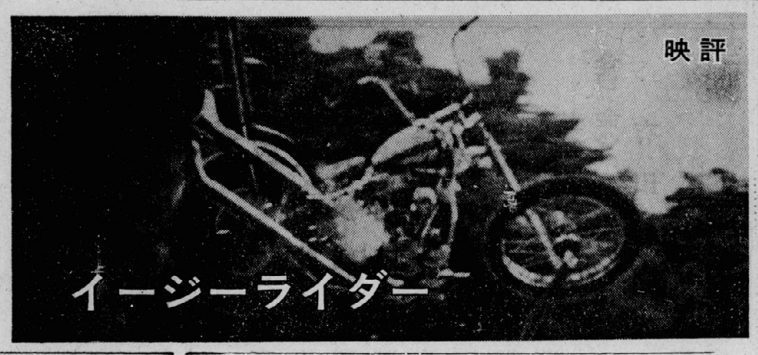
各戦線よりの怒りを組織して

東大病院反戦　東大技研共闘

東大病院反戦を代表して、まず京大病院看護婦・臨時職員三名のストライキに対して熱烈な連帯をおくりたいと思います。医療の場における労働力の搾取はまさに京大労研の場合と同じなのですが、70年にはいって東大病院においても、大学解体、医局講座制解体という東大の学生、院生が提起した問題は、全国学園闘争へ大きな波及を与えたわけです。昨年の十一月十日あるいは、その以前からの医師・看護婦・技師―病院労務者―としての闘いの契機は、東大闘争の中で東大の職員・労働者の再編に対する闘争が一切なく、明らかに臨時職員の大量の首切りあるいは処分があったわけですが、それに対する闘争も提起されず、そういう人々は一人一人消耗した形で捨てられていったわけです。その中で、われわれが一つの小さいスローガンとして「学生の東大闘争から職員・労働者の東大闘争へ」というものを上げたわけです。そしてわれわれは、昨年十一月十日から、医師一名、看護婦二名、計三名の病院労働者による、十一月佐藤訪米阻止へむけた政治ストライキを提起したわけです。そして十一月十日に三名の医療労働者が「佐藤訪米阻止・安保粉砕・沖縄闘争勝利」ならびに東大病院という労働生産点における課題として「総定員法粉砕・北病棟移転阻止」という内容を持った公務員のストライキ闘争としてストに突入したのです。東大の病院としては一・一八―一九以降の広がった状況の中で労働者からの大胆な問題提起であり、全共闘の各部隊に佐藤訪米阻止闘争への決起を促がしたわけです。三名のストライキは、最初は〝佐藤訪米阻止〟という形の政治ストライキとしていわれて来たわけですが、主要な闘争課題としては、やはり東大病院の中における医療の帝国主義的再編の、一つの結節点である北病棟移転阻止の闘争を三名を中心としてやり切れるかどうか、すなわち、生産点における政治ストライキ、拠点を守り切ってのストライキ闘争をやりきれるかどうかという問題であったわけです。十一月十日から年末にかけて、そういう提起を行なってきたわけですが、それにさらに内容を与えて、今日にいたるまで問題を継続してきたというのは、単に北病棟移転を阻止する、建物自体の移転を阻止するだけでなく、東大病院内における帝国主義的再編すなわち合理化の最たるものとしての課題である、人員の臨時職員化という問題を取り上げ、臨時職員の不当解雇撤回闘争を、同時に行ない「臨時職員の不当解雇撤回闘争」という形で、更なる闘争・北病棟移転阻止」という形で、更なる闘争の昂揚があったからです。ここで、医療情勢について述べますと、先ほども、京大病院の方が述べられましたように、端的にいって、医療労働者は、語ればきりがない程に問題をかかえているわけです。例えば、看護婦の絶対的不足、まさに政府自らが不足といい、全ての人々が不足といっている問題です。その不足といっている分析に対して、我々は健康保険制度の内容というものを、提起しなければいけないわけです。全医療産業の高度成長、そのなかでも、製薬資本・医療機械・建築資本の高度成長がすすんでいますが、それはすべて、労働者の保険料によってまかなわれています。そして、医者にかかる回数が多くなっているという事以上に、企業の論理として、営利化の問題として医療費がふくれ上がっています。その解決として、二つには、患者（国民、労働者）に対しての保険料値上げがあり、また、大病院における医療労働者に対しては、合理化を貫徹していくという方向が、現在とられているわけです。主要な医師の層化のをさせられるということが法律的に決まったわけです。そして、医師以外の部門においても臨時職員による合理化という形で、全国の病院においては、七十年、今年にはいってから医師部門、とくに若手の青医連部分に関しては、ダイレクトールといった形の問題を通じて、「当局好みの人間を選んでゆくという事案がかけられています。こうした動きは、三月二十日になわれた全国大学病院の病院長会議における統一見解のもとに行なわれ、「全国の大学病院において非常勤医師制度を導入し、同時に新病棟移転を各病院においてはかる、これは主要に東大を頂点とし京大、東北大、千葉大を中心にすすめてゆく。」という事が東大病院病院長を中心に意志統一されました。以上の様に、すべての動きが、北病棟移転へむけて行なわれていることは明らかだと思います。

我々は、今回の北病棟移転阻止闘争を単に東大のキャンパスにおける一つの病棟移転の問題としてではなく、全国の大学病院における合理化の環として行なわれるのであり、まさに東大病院長会議はブルジョアジー自身が、医療問題の七十年代へむけた解答を、北病棟移転を突破口としてやりきろうとしている。この点からまさにこの闘争をわれわれは捉らえての全面的闘争として、とらえ、病院長自身、団交の席上で「君たちとは最後の話突破なんだ」とはっきり言っているわけですが、一病院反戦に結集する医師、看護婦、技師、事務職員、そして全学闘・医共闘の学生、さらにはこの北病棟を計画した学部建築学科の大学院生、彼らは建築共闘として全共闘に結集しているわけですが、なぜあらゆる部分による移転実力阻止、座り込みによる実力阻止闘争として闘ぬいたわけです。これに対して、病院執行部は、自衛にもおよぶ機動隊を導入し病院の中、中央手術場、病室の中にジュラルミンの盾を通して、われわれ全員逮捕し長期拘留、さらには各闘争組織の代表一名正確にピックアップして起訴にもちこんでゆくという弾圧を加えたわけです。一方、もう一つの労働者の組織労働隊である病院職員組合―東大病院では、医師を職員から除いた形でつくられています。これは、この間の東大闘争の過程で、青医連の闘いが問題を提起し、全学の運動を担ってきた中で、青医連が職員組合に加入することにより職組配がくずれることを心配しているのかもしれませんが、はっきりと組合大会において、医師とは別々にやってゆく・医師排除を決定しているわけです。職組は看護婦、技師、事務職員だけの組織になっているわけですが―は、北病棟移転に関しての方針は、諸々の要求を出し、たとえば看護婦の数の問題、職組員数が二年前に病院長と約束した「二・八」を満たすために二百六十七名の看護婦が必要だ」という確認をとることによって、看護婦を要求するだけで、実際にそれをどうやって保障しようかという点については、一切彼らの方針を述べない。当局官僚的に職員職員という形で解決してゆこうとするのに対して、正職・臨職という問題に一切ふれずに、看護婦を要求するだけなのです。あるいは、具体的な細かい部屋の問題、ボイラーの問題、配膳の問題と細部に関して条件をだして、条件がかなえられれば移転したいという方針を堂々と出したわけです。しかし当局は、我々の反対にかかわらず、まったく一方的に、インフォメーションを行なったわけです。病院長は、ロックアウトの中で朝日からの報道関係、ロックアウトの中で朝日からの報道関係、ロックアウトの中で朝日からの報道関係

映評



徹底した無意味の表現

叫びの共有はた易いが

「暴力学生」という言葉の内包作用の分化が、はっきりと一極の方向を推し進められていた頃だ—それは、われわれ時代の鬼子たちが、不分明としてあったあらゆる言語の指示作用を煮詰化しわれわれの側へそのすべてを奪いその、無味の革命をラディカルに試みていた頃だ。T・Vスタジオに登場したわれわれ「暴力学生」を、奇異な者を目撃した時学まって彼らがそうするように、好奇と軽蔑の視線を上下させ、お互いにうなずきあって呟く婦人たちを見たのは、—あの人たち、ちょっと怪奇しいんじゃあない

かって—それは現在も続いている—ニンニクの臭いをもって〈朝鮮人〉を見ろし、持攻撃際による彼らの惨殺を、笑みを浮かべて評していったように、今、〈長髪〉ことが彼らの憎悪の対象であり、むき出しの敵意をもってこれを拒絶するひとつの群れがある。常に一歩後ろを、それも優越感と劣等感、疲憊と軽下の両極の間からが見ることのできないこの群れの人々は、あのハイジャック事件を狂気して歓迎したであろう。なぜならば、この事件は、彼らが後生大事にもっている卑劣なヒューマニズムを大々的に披露するキッカケになったばかりでなく、何よりもかの憎悪の対象である〈長髪〉を殴打し、この世から抹殺するに格好のチャンスを提供したからなのだ。

〈近代〉の確立過程にさえ、おどおどしながら常に一歩後からしがついてくることのできなかった—そしてたびたび遅り遅れることすらあったのだ—哀しい存在である彼らに応えるヒューマニズムを、われわれはもちあわせてはいない。それば、われわれはもちあわせてたであろう彼らは、われわれにとって、ひとつの惑乱すらある。というのは、68～69年の全共闘運動は、ある意味で、交換価値に対する反逆を徹底化することなく敗北していったのだし—彼ら、哀しい群れは交換価値の多化なのだ—もはや、可視的に見えなくなっている新しい型のファシズム（たとえば、テレビを見ながら優兵に行くといった）の時代に、世を闊歩するのは他でもない彼らなのだから。

ピートルズの天才たちの登場によって時代を画した〈長髪〉は、世の〈担性〉たちによって、美的な意味よりも、むしろ「苦悩せる者者の自己主張」として理解され、それを、社会のビズミが摩滅だした商品「意味づけ」することによって、再び卑少なヒューマニズムによる〈社会改革〉でくるむことを忘れなかった。しかし、思うに〈長髪〉は何よりも〈近代的理性〉を撃ってしまったのではなかろうか、知り事物という図式によって示されるであろう〈近代〉はまだ、交換価値の支配する世界でもある。〈長髪〉は〈近代〉から〈次代〉へ、全世界がドラスティクに動めき始めを開始している時、その時代性を肉体的に表現したものであったはずだ。近代的な意味を表出しただけなのだ。

近代的意味体系に対しては、自らの全的な意味体系を創りあげようとしているわれわれは、無意味をもって時代性を表現しようとしている学者たちに何が期待することはできない。無意味の延長線上に世をドロップアウトした者たちが創りあげようとした世界に、ぼくは〈不可能性の力〉を見ることはできなかった。幼年期の「ままごと遊び」のような、あるいは大形にダダをこねているとしか、彼らの村についての印象をぼくは受けなかったのだ。彼らはどこまで無意味の軌跡を描き続けるのであろうか。

しかしながら〈自由〉という言葉の原基的な損作用が、ブルジョアジーの支配力の前に崩壊しゆき、ひとつの抽象語しかなくなった今日的言語状況において、無言で行為することが最自由で、あるという時代のパラドックスがあることは確かだ。〈革命〉ですら例外ではない—「報革命」「人間革命」を想起せよ。そしてまた、驚くなかれ、〈ルメットすらコマーシャリズム〉にのみこまれてしまっているという現実を。イイダテを越えて、ミミメサから、自己を把握するに無業とする結のこの時代に、ぼくたちは絶叫することに何のためらいもない。

ピーターフォンダはさいわいなことに、ぼくたちと同様卑少なヒューマニズムをもちあわせてはいなかった。ハイジャック事件のとき、順当なアナウンサーの質問に、期待はずれ（アナウンサーにとって）の返答をした中央学の女の子に幻滅したように、ぼくたちの然然たる帯感を覚えることは何よりもこわかった。映像の異迫力が、もしぼくたちをして涙をそそらせることがあるならば、それはカワイソウだからは決してない。むしろクヤシサだ。なぜならば、ぼくたちの当為にとって敵はあまりにも強大であり他者との共通意志が〈憎みの共有〉でもって証されることは、過去の極限的な闘争の展開の過程で、ぼくたちが始めて抱かせたひとつの夏夢であるもの。

〈不可能性〉の表現に、〈近代〉を越える新しい芸術を仮説するとき、この映画は、少しも新しくはないけれど、その中に幾が引きずりこまれ微底的に破砕されてしまう様の直接的な打撃をぼくは受けた。〈意味するもの〉の弁証法的な意味されるもの〉の弁証法的な意味とは、今、別の位相—それを仮に〈無限性〉の位相とでもいっておこう—をぼくたちは備えなければならない。そして、それは〈可能性〉を全的に表出しようとした全ての〈リアリズム〉なのだ。ピーターフォンダが扮するキャプテンアメリカというう前や墨義隊の皮肉はともあれ、この映画を「マリファナ・人種問題・ベトナム戦争・既存社会に反抗する若者と大人の断絶など、数多くの問題を抱えて喘ぐ巨大な国—アメリカ」を

〈〈〈